

とりかへばや物語の研究

——作者の男・女観をめぐって——

西郷 みつ子

『とりかへばや物語』は、松尾聰氏・鈴木弘道氏を中心に諸先生の御研究によって古本と今本の関係が解明され、その評価も性関係の頽廃した時代相を反映した猟奇的な作品とされている。私は、関根慶子博士の「平安時代の文学と服飾の世界」(注1)や瀧澤貞夫先生の「枕草子『小白河といふ』段試解」(注2)などの御論考に導かれ、作品中の服装の特色に注目し、さらに、作中人物使用の楽器に認められる特徴について考察してみたい。

なお『とりかへばや物語』の本文には、さまざまな問題があるわけであるが、今本の一本を用いて、あくまでその本文を一つの作り物語の姿として、ここでは扱うこととする。

一 服装の色について

『とりかへばや物語』に現れるすべての服装の色は、
青朽葉・青摺り・薄色・梅・葡萄染め・紅・紅梅・濃き
・桜・白・撫子・萩・二藍・藤・紫・萌黄・山吹・尾花

色・女郎花である。このうち男性の服装は、青摺・薄色・葡萄染め・紅・桜・白・紫・萌黄・山吹・尾花色であり、女性は、青朽葉・薄色・梅・葡萄染め・紅・紅梅・濃き・桜・白・撫子・萩・二藍・藤・萌黄・女郎花に分けられる。用例数において男性に一番多く用いられている色は△紅▽で、女性は△白▽と△紅梅▽である。そこでこれらの色は『とりかへばや物語』におけるそれぞれ男性・女性に特徴的な色だと考えられる。

『とりかへばや物語』に認められるこれらの服装について『源氏物語』『枕草子』ではどのように着られているのかを調べてみた。表Iはその結果である。なお尾花色は『源氏物語』にも『枕草子』にも用例が見られなかったため省略する。

〔表Ⅰ〕

色名											総数	
青朽葉	3	3	21	39	17	2	21	3	3	3	31	36
青摺	0	2	17	10	0	3	2	0			13	9
薄色	18	1	22	7	2	18	1	3			18	27
葡萄染め	2											
紅梅	39	17	2									
紅	21											
濃き	31	36										
桜												
色名											総数	
撫子	6	59										
白	0	0										
萩	1	14										
二藍	14	14										
藤	14	14										
紫	9	6										
明黄	5	10										
山吹	18	2										
女郎花	2	18										
色名											総数	
女	2	12										
郎	12	5										
花	5	8										
女	2	12										
郎	12	5										
花	5	8										
色名											総数	
女	2	12										
郎	12	5										
花	5	8										

次に、『源氏物語』『枕草子』を一括して平安時代の通常の男・女別の服装のとらえ方と見なし、『とりかへばや物語』の場合の特徴の分析を試みてみたい。

まず、二藍は両作品では△男の色▽と認識されていた。青朽葉・薄色・梅・紅梅・濃き・撫子・萩・山吹・女郎花は△女の色▽とされている。男女どちらでも通用する服は青摺・葡萄染め・桜・藤・紫・明黄である。『とりかへばや物語』との相違点を明らかにするため、男の色

・女の色とまとめてみると

【男の色】

◇とりかへばや物語で男性に特徴的な色

紅

◇男性だけが着ている色

青摺・紫・山吹・尾花色

◇源氏物語・枕草子で男性に特徴的な色

二藍

【女の色】

◇とりかへばや物語で女性に特徴的な色

紅梅・白

◇女性だけが着ている色

青朽葉・梅・紅梅・濃き・撫子・萩・二藍・藤・女郎花

◇源氏物語・枕草子で女性に特徴的な色

青朽葉・薄色・梅・紅梅・濃き・撫子・萩・山吹・女郎花

【男女どちらでも着ていた色】

◇とりかへばや物語

薄色・葡萄染め・紅・桜・白・明黄

◇源氏物語・枕草子

青摺・葡萄染め・桜・藤・紫・明黄

この結果、△二藍▽と△山吹▽に注目すべき相違点が見出される。△二藍▽は『とりかへばや物語』では、

二藍の単衣に紅の袴、あざやかに踏みやりて、帯ゆるやかにうちして、(三・川)〔女童〕(注3)

このように女性の服装であるが、『源氏物語』『枕草子』では男性の特徴的な服色に挙がっている。逆に山吹は『とりかへばや物語』では、

桜、山吹など、これは色々なるに、萌黄の織物の狩衣、葡萄染めの織物の指貫着て、

(一・三十九)〔女君〕

このように男性特有の服色であるが、『源氏物語』『枕草子』では女性に特徴的な服色である。△薄色▽も『源氏物語』『枕草子』では女性に特徴的な服色であったが、『とりかへばや物語』では男女どちらも着ていた。

これらの服色を用いている人物は、△山吹▽△薄色▽は女君(注4)であり、△二藍▽は女童である。

『とりかへばや物語』で男性に特徴的な服色であった△紅▽と女性の△白▽について更に具体的に詳しく分析を進めてみたい。

△紅▽は、『とりかへばや物語』での用例は、総数九、男女別では男五・女四である。男性の例はいずれも女君が中納言の時期の用例である。中納言という位階で定められた袍の色は浅紫(薄紫)であり、△紅▽は四位の深緋・五位の浅緋に当たる。そこで『とりかへばや物語』のこの5例はいずれも位階の色にとらわれず中納言のお気に入り好みの色と志手の△紅▽であったと見られる。

そこでこの物語における△紅▽は男の服色であるという事ができよう。

『源氏物語』『枕草子』では表Iからすると△紅▽の用例は総数三十九 男十七 女二十二である。

くれなるの涙に深き袖の色を浅みどりやいひしをるべき 恥かし」と宣へば、 「源氏物語」

この位階により定められた色の例と、柏は普通表は綾絹、裏は平絹の袷で、表裏ともに紅であったから、

単は白き。日の装束の、紅の単の柏などかりそめに着たるはよし。 「枕草子」

この柏の例三例を除くと総数三十五 男一三 女二十二となる。女性の服色が圧倒的に多いことから、△紅▽は普通は女の色であるという事ができるだろう。

次に△白▽については『とりかへばや物語』では用例数六性別では男一 女五である。白い衣服は病氣や妊娠・出産時には必ず着られるものだったので『とりかへばや物語』の巻二の出産後の七日の夜のお祝いの場面の

ささやかに細うをかしげなる人の、色は隅なく、白き衣どもに埋もれて、頭に菊の上おぼえて綿ひき散らされたり。

右大臣の四の君の白き衣ども、と巻四で女東官の妊娠を描く

宮の御前は、白き御衣の厚肥えたるを、御髪ごめに引き被きてぞ大殿籠りたる。

の二例は好みによる服色とは異なるので、やはり除外しなくてはならないだろう。しかし、除外しても『とりかへばや物語』での用例総数四の男女別の差は男一 女三であり、やはり白は女の服色と見なさざるを得ないのである。

ところが『源氏物語』『枕草子』での用例総数は五十九、男女別は男三十三 女二十六となる。『とりかへばや物語』同様、病氣や妊娠・出産時の例四を除外しても総数五十五の男女別は男三十三 女二十二となり逆に八白Vは男の服色とするのが普通の感覚ということになる。ところで

八月ばかりに、白き単なよらかなるに、袴よきほどにて、紫苑の衣のいとあてやかなるをひきかけて、胸をいみじう痛めば、友だちの女房など、数に来つとつぶらひ、
(枕草子 一八三段)

は、病氣の場合の描写であるが、この八白い単Vは健康な時でも『源氏物語』『枕草子』の用例総数六のうち男性五例 女性一例(あと一例女性で白い単を着ている例もあるがこれは病氣の時なので除く)で男性の着る服色であることがわかる。特に『枕草子』の第二六七段では、男の単について

単は白き。日の装束の、紅の単の柏など、かりそめに着たるはよし。されど、なお白きを。黄ばみたる単など着たる人は、いみじう心づきなし。練色の衣

どもなど着たれど、なほ単は白うてこそ。

と述べ、男の単は白がいいのだと繰り返し強調している。ところが、『とりかへばや物語』では「白き生絹の単衣」「女君」の男としての着用例ばかりでなく、「白き単衣」「吉野宮の姉妹の侍女」という女性の着用例が目につく。白き単衣の萎えほころびがちなるに、何の裳にか気色ばかり引き懸けて、
(四 一六八)

八白Vい色の服を着ている女性は、男君・吉野の姉宮・吉野宮の姉妹の侍女である。

紙幅の制約で十分例証をし得なかったが、これらの現象からみて、作者は、服色面での男女の常識的な識別とそれとらえ方や作中人物での用い方が相当ズレているといえるだろう。普通の人なら当然男性に着せるべき服色を女性に着せ、その逆の事も行ったりしているのである。それも、女君、男君の場合は、性を転換させているという特殊事情から、或いは生来の好みが出てしまったところらのズレをとらえてもよいのかもしれない。しかし、侍女など性の転換とは何ら関わらない端役の登場人物についても数多く、このような普通の感覚とは異なる色彩感覚のズレを同様に示しているのである。これは、作者自身の色彩感覚そのものがズレていることよってひき起こされた特徴的現象とみなされるべきだと考えられるのである。

二 楽器について

前章で認められた、作者の男女間の好み、性的区別のズレは服色ばかりでなく当然他の分野にも見出される筈である。『とりかへばや物語』は、ストーリー中心で叙述に乏しいので、それらの摘出は困難であるが、次に作中に用いられている楽器について、用例の分析と考察を試みてみたい。

『とりかへばや物語』で人々が演奏している楽器は、笛・横笛・琴・琴の琴・箏の琴・琵琶・箏である。男性はこれらのすべての楽器を演奏している。これに対し女性が演奏している楽器は琴・箏の琴・琴の琴・琵琶である。

様々な文献を徴すると、この時代男性はほとんどすべての楽器を弾いていたので特に特徴的な楽器といえるものはない。一方女性に特有な楽器は、『とりかへばや物語』で見ると、登場する主な女性のうち箏の琴を演奏していないのは、吉野宮の姉妹だけということが浮かびあがってくる。けれども姉妹の代わりにその侍女が箏の琴を弾いている。そこでハ箏の琴Vは女性に特徴的な楽器とすることができよう。

先程挙げた楽器の中から一般的な笛・琴の琴・箏の琴・琵琶の四種を取り上げ、『源氏物語』『枕草子』について服色と同様にして調べてみた。なお、琴という言葉

には多くの楽器を含むためハ箏の(御)琴Vハ琴の(御)琴Vと明記してあるものだけを取り上げる事にした。また、実際に演奏しているものだけを取り上げてみた。

〔表Ⅱ〕

楽器				総数	男	女
琵琶	8	35	38	39	20	19
箏の琴	5	17	38	20	5	3
箏の箏	0	18	0	19	3	18

この結果から、平安時代の普通の人々から笛は完全にハ男の楽器Vと認識されていたらしい。その他の楽器三種については数的には男女どちらの楽器であるかはつきりと断定できない。

『とりかへばや物語』と『源氏物語』『枕草子』とを比較するためにまとめる

【男の楽器】

◇とりかへばや物語で男性に特徴的な楽器

琴・笛

◇源氏物語・枕草子で男性に特徴的な楽器

笛

【女の楽器】

◇とりかへばや物語で女性に特徴的な楽器

等の琴

◇源氏物語・枕草子で女性に特徴的な楽器

特になし

と、ここでもやはり相違点が出てくることが知られる。

ハ笛Vは『源氏物語』『枕草子』で女性の演奏している用例は一例もない。だが、『とりかへばや物語』では巻四で、女君と女東宮が

督の君は、明け暮れさし向ひ、隔てなく御物語も聞えさせ、琴・笛の音をも同じ心にうち遊びつつ、

と、女性の笛を吹く場面が見出されこれは『とりかへばや物語』に見られる大きな特徴である。

次にその他の三種の楽器について、使用の用例数も多く人物についてもはっきりしている『源氏物語』を取り上げ、更に詳しく分析してみたい。

『源氏物語』でハ等の琴Vを演奏している女性達は、

明石中宮・紫の上・宇治の中君・大君・女二の宮・雲居

雁・明石の上である。明石中宮は明石の上から、明石の

上は明石入道に手ほどきを受けている。明石入道は、

なにがし、延喜の御手より弾き伝へたる事三代にな

むなり侍りぬるを、かう拙き身にて、この世の事三

代になむなり侍りぬるを、

(明石 七四)

と表されるように、「延喜帝―前大王―明石入道」とい

うルートで伝えられた等の御琴の名手である。紫の上は

源氏から、宇治の姉妹は宇治の八の宮からそれぞれ手ほ

どきを受けている。いづれも天皇の系譜に連なる人々か

らの伝授であり、明石入道にしろ源氏にしろ宇治の八の

宮にしろ奏法を伝える相手が女子しかいなかったために

彼女達に伝えたのである。つまり、元々等の琴はハ男の

楽器Vだといえよう。それは等の琴を演奏している女性

の全用例数十八例の中から明石の上・明石中宮・宇治の

姉妹の用例十四を除くと四例だけが残るに過ぎないこと

からいえる。一方、等の琴を演奏している男性の例は十

七例である。これを比べてみても等の琴はハ男の楽器V

であったといえる。ところが、『とりかへばや物語』で

は等の琴は前述の如く女性に特徴的な楽器であった。

『源氏物語』でハ琴の琴Vを演奏している女性は妹尼

と女三の宮である。女三の宮には、初め父院の朱雀院が、

その後は源氏が手ほどきしている。

院のお前にて、親王達内親王、いづれかはさまゞ、

とりゞ、のざえ習はせ給はざりけむ。そのなかにも、

取り立てたる御心に入れて伝へうけとらせ給へるか

ひありて『文才をばさるものにていはず、さらぬ事

のなかには、琴弾かせ給ふ事なむ一のざえにて、次

には横笛、琵琶、等のことなむ次々に習ひ給へる』

とうへもおぼしたまはせき。(総合 二〇二)

と螢兵部卿の宮に言われるように、源氏は元々琴の琴の名手であった。この場合も伝える男子がなかったため女三の宮に伝えたに過ぎないのである。琴の琴を演奏している女性の二例から女三の宮の一例を除くと残りは一例となる。これを男性の例五例と比べると琴の琴もやはり元来はハ男の楽器Vであった事がわかる。だが、『とりかへばや物語』では吉野宮の姉妹がこの琴の琴を弾いている。但し、この二人の場合も父親である吉野宮が唐で習った琴の琴を伝える男子がなかったので姉妹に手ほどきしたのである。だから、中納言(女君)が「琴の琴を習いたい」と申し入れると抵抗なく教えている。

同様にハ琵琶Vを演奏している女性は、明石の上・少将の尼君・中務の君・源氏侍・少将命婦・按察大納言の中の君・宮の御方・宇治の姉妹である。明石の上は明石入道から、宇治の姉妹は宇治の八の宮からそれぞれ手ほどきを受けている。明石入道は筆の琴でも触れたように楽器を演奏する名手であり、琵琶も彼が得意とする楽器であった。彼は源氏に娘明石の上の琵琶の腕前を

「聞召さむには、何の憚りかは侍らむ。お前に召しても、商人のなかにてだにこそ、ふること聞きはやす人は侍りけれ。琵琶なむ誠の手を弾きしづむる人、古へも難う侍りしを、をさ、滞ることなう、なつかしき手など筋ことになむ。いかでたどるにか侍らむ、荒き波の声にまじるは、悲しうも思う給へられ

ながら、かきつむる物歎かしさ、まぎるる折々にも侍る」など、すき居たれば、
(明石 七五)

のようにアピールしている。また、螢兵部卿宮は

琵琶は例の兵部卿の宮、何事にも世に難き、物の上手にあはして、いと二なし。(若葉上 三四八)

と言われるように当時の琵琶の第一人者だった。琵琶を演奏している女性は、十八例から明石の上・宇治の姉妹の九例を除くと九例となる。これと男性の十五例を比べると琵琶も傾向として、どちらかといえばハ男の楽器Vであったといえる。『とりかへばや物語』で琵琶を弾いているのは吉野宮の姉妹である。この場合も吉野宮に手ほどきを受けている事を考慮する必要がある。

以上の如く楽器においても服色同様『とりかへばや物語』の作者の、男の楽器、女の楽器という理解の仕方に普通の人とのズレを認め得ると思われる。

三 『とりかへばや物語』の作者像とその執筆要因

このように『とりかへばや物語』の作者には、ハ服色Vやハ楽器Vに普通の人の男と女のとらえ方とはズレが認められた。男・女というとらえ方が普通の人とは逆になっている部分もあった。この物語の作者は、男・女というとらえ方の基準が普通の人とは異なっていた。ある

部分での作者にとっての男は普通の人になれば女であり、作者にとっての女は普通の人から見れば男であった。作者の男・女というとらえ方がある部分では普通の人とは逆になっていたという事からすると、『とりかへばや物語』が構想され執筆された事は作者のこの特異な嗜好からすれば、ごく自然な事だったのではなからうか。作者が男だ・女だと考えている服色や楽器が普通の人の男だ・女だと考えているものと逆転していることを、作者はしばしば現実に体験したことであろう。この経験が積み重なれば、男が女として社会に認知され、女が男として社会から認知されたとしたらどうなるか、そんな物語が構想されたとしても当然の事だったのではなからうか。

私は、『とりかへばや物語』の執筆要因をこうした作者の特異な男・女観によるものと考えたい。『とりかへばや物語』にはこの作者の嗜好が反映されているのではなからうか。

作者の特異な嗜好が反映され、特色ある作品世界を形成し得ている作品として他に『提中納言物語』の中の「虫愛づる姫君」が挙げられると思う。この作品の成立年代は山岸徳平氏・鈴木一雄氏によると

「侍り」の的確な使用から平安時代の作品と見られ、本文中の「なもあみだぶつ」「よき極楽」などの語の検討から、源信に由来する浄土信仰のかなり弘通した時代と考え、およそ堀河・鳥羽両天皇ごろか、

下っても崇徳天皇ごろまでの成立とされるのである。一方『とりかへばや物語』も鈴木弘道氏によると古本が承暦四年（一一〇八〇）前後より康和二年（一一〇〇）ごろ、或は長治二年ごろまでの間、今本はその後、嘉応二年（一一七〇）ごろまでの間に成立したのではないかと言われる。これは、白河・堀河・鳥羽・二条・高倉天皇の時代に当り、ちょうどこの「虫愛づる姫君」の成立年代と重なっている。

『とりかへばや物語』では、男女の「とりかへ」の原因を天狗のせいとしている。事実平安末から鎌倉初期の時代は、天狗が社会全体に大きな影響を及ぼすと信じられていた。天狗の所業は自然の理と見なされ、一種の諦念が支配的となっていた。そこで、何かわけのわからない事がおこると皆きまって天狗のせいとしていた。男と女が「とりかへ」られて成長するなどという魔訶不思議な事柄は天狗の仕業と説明する以外に、当時の人々に理解してもらえなかっただけのことと思われる。そこで物語上の男女の「とりかへ」の原因が天狗にあったという説明は別におかしなものではなからうか、それは飽くまで方便にすぎず、実際の原因はやはり、作者の特異な男・女のとらえ方（男・女観）による、とすべきではなからうか。

前述の如く主人公であり男女の「とりかへ」のおこる女君と男君の間だけでもし、服色▽や楽器▽の交換が

行われているのならば、男女の「とりかへ」を行うための作者のこれも一手法と見なすこともできよう。しかし実際に服色や楽器の交換現象が認められるのは、女君・男君の他に女童・吉野の姉宮・吉野宮の姉妹の侍女（服色）・女東宮・右大臣の四の君・吉野宮の姉妹・その侍女（楽器）の範囲にまで及んでいる。

元来『とりかへばや物語』の今本は、ストーリー中心で話が進められており、場面毎の描写は非常に少ない。その少ない描写の中でへ服色Vとへ楽器Vの面で作者は通常の人の男・女差の感覚と喰い違いを示している点は、注目すべき現象なのではなからうか。

作者は『とりかへばや物語』の中で再三へ世に例なきVへ世に似ずVへ世に類なくVへ世の中Vへ世になきVと盛んにへ世Vという言葉を連発している。この物語ほどへ世Vという言葉が頻繁に使われている物語は他にないのではなからうか。このように何度もへ世Vという言葉を使う作者の姿勢はへ世Vつまり「世間一般の基準」を強く意識し、その基準からズレたとらえ方を作者は茶化しているのではないのかという気がしてならない。

当時の女性が、男性の側からみると、いかに虐げられ矛盾の多い、はじめな境遇に置かれているか、作者は男君を女にし、女君を男にする事によって、その点を浮き彫りにし、読者に訴えようとしたのかもしいない。そしてこのような視点は作者の男女の感覚のズレによって生

み出されたものであり、恰も「虫愛づる姫君」の作者が、昆虫の生態に異常な興味関心を抱き、毛虫が羽化して蝶になるという真実世界を物語とした如く、「世の中」の慣習、人間社会の掟に対し、男女差の矛盾をあばこうとしたのではなかったであろうか。作者は唯単に、猟奇的好奇心で、ストーリーの奇をてらうだけの意図でこの物語を執筆したのではないと考えたい。

最後に、終始御指導をいただきました瀧澤貞夫先生に心より御礼申し上げます。

注1 関根慶子教授退官記念「寝覚物語対校・平安文学論集」風間書房 昭和五十年九月

注2 国文学言語と文芸第九八号 昭和六十一年一月

注3 本文引用は『とりかへばや物語』（一）〜（四）

全訳注 桑原博史 講談社学術文庫『対校源氏物語新釈 一〜六 木之下政雄 国書刊行会』
『枕草子総索引 村松博司 右文書院』によつた。

注4 登場人物の呼称については、便宜上女主人公を女君、その兄を男君として統一する。

（さいごう みつこ 諏訪郡原村 原中学校教諭）